

カンボジア訪問報告書

～カンボジアにおける関西大学の国際教育プログラムの可能性について～

関西大学大学院 総合情報学研究科 社会情報学専攻
久保田・黒上研究室「カンボジア NGO 協働プロジェクト」

提出：2012年1月5日

久保田賢一*、吉田千穂**、平川成一**

*総合情報学部、**総合情報学研究科

1.はじめに

本研究グループは、これまで、シリア、フィリピン、中国、オーストラリア、ハワイなど海外の大学や NGO と協働したプログラムを計画、実施、評価を行ってきた。これらの活動をさらに発展させようと、2011 年からカンボジアでの活動を開始した。カンボジアでは、交流学习と国際教育プログラムの可能性に関して、調査を行ってきた。本稿では、これらの調査の結果について報告を行う。

まず 2011 年 3 月に久保田と、大学院生である吉田・平川の 2 名がカンボジアを訪問し、現地の大学、NGO と連携した国際交流・協力活動の可能性について調査を行った。主な訪問先は EPS(Education for Population Support Foundation、以下 EPS)というカンボジアのローカル NGO とカンボジア・パニャストラ大学である。

3 月の滞在中に 1)カンボジアの小学校と日本の小学校の交流学习 2)関西大学の学生を対象としたスタディツアーの 2 点について EPS と連携して実施するという合意を取り、4 月～8 月は電子メールとビデオ会議を使い、情報共有とともに意見交換を行い、相互理解を深め、2 つの教育プログラムの準備を進めた。

2.教育プログラムについて

2.1 関西大学初等部とカンボジア・ワットスバイ小学校の交流学习

2.1.1 概要

関西大学初等部では、子どもの国際理解力を育成するために、海外との交流を積極的に押し進め、これまでに米国、オーストラリア、フィリピンやシリアなどの国々と交流学习を行ってきた。

2012 年度には小学校 3 年生の 2 クラスがカンボジアとの交流学习を行おうと、準備を始め、本交流プログラムには関西大学総合情報学部および研究科の学生 9 名が、小学校の学習支援に参加している。

関西大学初等部の授業の流れとしては、まず、関西大学初等部が存する高槻市を取り上げ、「高槻のおすすめ」というテーマに沿って児童は高槻市のおすすめのお店やスポットについてグループごとに調べ学習を行った。そのうちの一つに高槻市駅近辺にあるカンボジア料理店を調べるグループがあり、それをカンボジア学習の導入としてカンボジアについて児童の興味関心を持たせた。カンボジアに渡航した院生がゲストスピーカーとして授業に参加し、カンボジア紹介を行った後に、カンボジアについて児童が調べ学習を始めた。このような授業展開の流れの中で調べ学習と同時に、関西大学初等部とカンボジアのワットスバイ小学校の交流学习を行った。

ワットスバイ小学校との交流に向けて、まず日本側がおもちゃを作り、カンボジアの子どもたちに手作りのおもちゃで遊んでもらおうという取り組みをすることになった。具体的な物を介しての交流の方が、児童同士の交流に対する実感が具体化しやすいことと、カンボジアも日本も子どもが共通に興味を持つだろうということでおもちゃ作りを行うことになった。初等部の教員 2 名が夏休み期間にカンボジア訪問することが決定していたため、

日本の児童が制作したおもちゃを交流先であるカンボジアのワットサバイ小学校に持っていくこととなった。初等部の児童は3、4名で1グループ(全16グループ)を作り、グループごとに工夫を凝らしながらおもちゃを作成した。

日本の児童によるおもちゃ作りの合間に、交流への実感を高めるために交流先であるワットサバイ小学校とビデオ会議システムを使って接続することとなった。しかし、ワットサバイ小学校に電気は通っているが、インターネットに接続できる環境がないため、EPSがPCやインターネット接続機材をワットサバイ小学校に持ち込んで、ビデオ会議システムを使った交流を行った。カンボジア側は無線LANで接続していたため、十分な接続速度を得ることができず、画面がフリーズしたり、音声途切れたりすることもあったが、日本の児童はカンボジアの児童と対面して会話を交わし、交流相手の存在を実感することができた。時差と授業の関係上、設定した時間帯が日本の放課後であったため、児童全員が参加することはできなかったが、顔を見ながらリアルタイムで交流したことで、カンボジアに対する興味関心が高まった。一方、カンボジア側は、今回のようなインターネットを介して外国の子どもと交流する授業を行ったのは初めてで、ビデオ会議システムがつながると同時にカンボジアの児童から歓喜の声が聞こえた。カンボジアの小学校教員の代わりにEPSの日本語を話せるスタッフがファシリテータとなった。クラスの半分程度の児童は放課後に英語塾に通っている為、簡単な英語でカンボジアと日本の児童同士が会話することがあった。また、カンボジアの1名の児童は日本語塾で学んでいる為日本語を使って、日本の児童に質問をするような場面が見られた。両児童の質問の内容は「どんな食べ物が好きですか?」「休みの日は何をしていますか?」など児童の嗜好や生活に関するものが交わされた。また、Webカメラを動かし、両小学校の教室を児童が説明を加えながら紹介を行ったりもした。カンボジアの児童も、日本の児童と交流したことで日本についての関心が高まったと思われる。

カンボジア訪問前の活動は以下の表に示す。

日付	内容
2011年6月11日	大学院生(平川)によるカンボジア紹介 パワーポイント、動画を使って、カンボジアの概要について子どもに紹介する。関西大学の大学生2名がサポートを行う。
2011年6月29日	EPSと教員ミーティング(ビデオ会議) EPSのスタッフと教員の初顔合わせ。
2011年7月8日	関西大学初等部とワットサバイ小学校間のビデオ会議の接続確認を行う。
2011年7月9日	班ごとに、おもちゃを作成する。大学生9名がおもちゃ作りのアドバイスをサポートを行う。
2011年7月13日	初等部3年生20名とワットサバイ小学校の5年生46名によるビデオ会議による交流。

夏休みに入り、初等部の教員2名が7月31日から8月7日の間カンボジアを訪問した。滞在中はカンボジアの小学校でおもちゃを使った交流学習の実施に加え、日本の教員が今後国際理解学習を実施するための教材や情報収集を兼ねて教育関係のNGO、日本人が活動しているNGOの訪問を行った。また、地雷博物館、国立博物館、ローカルマーケット、寺院の見学などを通して、日本でカンボジアについての学習を進めるために、カンボジアについて教員自身が理解を深める機会を設けた。各団体の概要については添付資料として

記載する。

日本の初等部教員の滞在中の活動を以下の表に示す。

月	日	曜日	活動
7	31	日	カンボジア到着
8	1	月	<ul style="list-style-type: none"> ・EPS についてオリエンテーション ・国際 NGO、PEPY 訪問 PEPY：小学校で活動し、教育開発を行っている ・EPS 活動サイト訪問(小学校、農村)
	2	火	<ul style="list-style-type: none"> ・世界遺産；アンコールワット見学
	3	水	<ul style="list-style-type: none"> ・クメール伝統織物研究所(IKTT)訪問(町中&伝統の森) IKTT：日本人、森本喜久男さんが運営する NGO。消滅しつつあったクメール伝統織物を復活させるために活動を行っている ・アキラ地雷博物館見学 ・トンレサップ湖見学 ・EPS スタッフと打ち合わせ
	4	木	<ul style="list-style-type: none"> ・ローカル NGO；ACODO 訪問 ・シェムリアップ市内寺院見学 ・ワットスバイ小学校と打ち合わせ ・EPS スタッフと打ち合わせ
	5	金	<ul style="list-style-type: none"> ・ワットスバイ小学校と打ち合わせ ・ワットスバイ小学校にて日本のおもちゃ交流 ・EPS スタッフと今後の交流について打ち合わせ ・国立博物館見学
	6	土	<ul style="list-style-type: none"> ・ローカルマーケット見学 ・寺院見学
	7	日	日本帰国

8月5日は、日本の初等部教員がワットスバイ小学校を訪問し、2時間程度の交流学习を行った。日本の教員は日本の遊びをカンボジア児童に教えたり、初等部の児童が作ったおもちゃを紹介した。日本の教員はカンボジアの児童が日本の児童が手作りしたおもちゃで遊んでいる様子やおもちゃの感想のインタビューをビデオに撮影し、日本の児童のカンボジア学習の素材集めを行った。夏休み以降に、日本の児童はカンボジアの児童が遊んでいる様子をビデオ視聴し、自分たちが作ったおもちゃについて評価を行う。また、ビデオを見ることで、自分が作ったおもちゃをカンボジアの児童が実際に遊んでくれたという実感を持ってもらい、カンボジアに対する親近感を持たせ、それがカンボジアの児童と交流していくんだという意欲を高め、異文化理解をするための動機付けにつなげる予定である。

ワットスバイ小学校でのおもちゃ交流の様子		
		
カンボジアと日本の教員によるミーティング	カンボジア児童の前で自己紹介を行う日本の教員	おもちゃの遊び方を教える日本の教員とカンボジアの児童



カンボジアの小学校では、8月は雨期休みの最中で休校期間であったが、カンボジアの5年生46名中36名が補習クラスに参加していた。そのため、今回の交流では36名のカンボジア児童が参加した。交流学习の授業の流れは、まず日本の教員が自己紹介を行い、カンボジアの児童と折り紙で紙風船を作るアクティビティを行った。カンボジアの児童は自分自身で作った紙風船でクラスメートと楽しく遊んでいた。その後、15分間休憩を取り、その間、日本の教員が日本の児童が作ったおもちゃを用意した。周りで見っていたカンボジアの児童は日本の教員が準備しているおもちゃに興味津々で、教員が並べたそばからおもちゃを手にとって遊んでいた。休憩後は児童を8グループに分け、1グループ2つのおもちゃを振り分け、遊んでもらった。日本の教員はグループに分かれて活動してもらおうと当初計画していたが、実際には子どもたちは自由に色々なおもちゃを手に取り遊んでいた。おもちゃの遊び方の説明カードを用意していたが、子どもたちは遊び方の説明がなくても自由な発想で遊び、自分たちで自分なりの遊びを考えていた。例えばペットボトルや箱をくっつけた楽器は見た目では楽器と分からないので、いくつかのパートに分解してボールのように投げて遊んでいた。全く遊び方がわからないおもちゃについては、教員が各グループ回り、遊び方を説明した。例えば各国の国旗の柄が入ったカードゲームのおもちゃがあったが、カードを持ってカンボジア児童は一枚一枚見ているが、日本の教員からババ抜きやり方を教えてもらい、教員の動きをまねて遊び方をすぐに理解し、数名児童でババ抜きをし始めた。

日本の児童が作ったおもちゃはとても好評で、カンボジアの児童は次から次に新しいおもちゃを手に取り、遊び続けていた。手作りおもちゃである耐久性がなく、半分くらいのおもちゃが壊れてしまったが、カンボジアでは普段、ゴムとびや、小さいボール、石を布に入れた簡易ボールや、学校に併設されている場合は滑り台などで遊んでいる為、普段とは異なった遊び方をカンボジア児童は体験することが出来た。カンボジアの子どもが日常であまり手にしていないようなキラキラしたプラスチックのビーズを使ったおもちゃや、プラスチックトレイでできた船など日本人児童の発想でオリジナルに作られた遊びを通して、カンボジアの児童は好奇心や発想力を膨らませながら、楽しんでいることが読み取れた。

日本の教員は、カンボジアの児童がおもちゃで遊んでいる様子とインタビューをビデオ撮影した。カンボジアの児童の半数程度が、放課後の英語塾に通っているため、簡単な英語で日本の教員に話しかけたり、インタビューに答えたりしていた。インタビューをクメール語で答えてくれた児童には、EPSのスタッフが付き、日本語に通訳を行ってくれた。

2.1.2 課題

これまでの活動を振り返り、日本とカンボジアの交流学习の課題として、次の3点をあ

げることができる。1)言語 2)インターネット環境 3)交流学习の経験とカリキュラム上での位置づけである。

1) 言語

カンボジアではクメール語が母語であり、英語を話す教員は少ない。カンボジア滞在中にワットスバイ小学校の教員と日本の教員は2回ミーティングの機会を持った。初回のミーティングでは、ワットスバイ小学校の校長先生一人とあいさつと交流学习の授業の打ち合わせを行ったが、校長先生は英語ができないため、EPS スタッフに日本語／クメール語の通訳を頼んだ。しかし、EPS スタッフの日本語は初級程度のレベルであったため、十分に両教員が意思疎通をすることが難しかった。2回目のミーティングには、英語を話すことができる交流相手である小学校5年生の担任教員が参加し、英語でやり取りができたため、交流学习の授業の打ち合わせと、意見交換がスムーズに進んだ。

EPS スタッフの英語力は十分とはいえず、英語を話すことが出来ないカンボジアの教員とのコミュニケーションを行うことが難しかった。カンボジア側に英語ができる人を配置するなど、言語に対する何らかの手立てが必要だと思われる。

2) インターネット環境

ワットスバイ小学校では電気は通っているものの、コンピュータなどの設備は整っていない。シェムリアップの都市部では観光客が多く、インターネットカフェがあり比較的インターネットにアクセスしやすい環境があるが、教育の情報化は進んでいない。また、カンボジアの小学校の校長先生や担任教員によると、インターネットカフェに行くことはないようで、教員たちのインターネット活用スキルはないものと思われる。

そのためワットスバイ小学校とインターネットを活用した交流を実施するには、EPSのような外部支援組織が必要となる。また、EPS スタッフもインターネット活用スキルが十分に身に付いているとはいえず、日本側から研修を行うなどのサポートが必要である。

もしくは、インターネットを活用しないで交流を行っていくことも可能かと考えられる。

3) 交流学习の経験とカリキュラム上での位置づけ

カンボジアの小学校には、日本の「総合的な学習の時間」のようにテーマに応じた活動を組み入れたりできるカリキュラムはない。今回の交流学习はワットスバイ小学校にとって初の試みであり、普段から日本とカンボジアの教員がコミュニケーションをとることはなく、カンボジアの教員にとって1回限りのイベントだと捉えられている。カンボジア側も授業として交流学习を行うためには、異文化理解の重要性を理解し、学習目標を設定することが求められるが、それを期待するのは難しい。初年度は日本の教員がイニシアティブをとり、交流を進めていく必要があるだろう。その活動を通して、両者がEPSを含めて協力し合い、今後の交流の方向性を調整していくことが大切である。カンボジアの教員が、活動を通して交流学习に興味を持つようになり、児童への教育的意義を見出し、継続的な交流をしたいと思うように活動を展開していくことが求められる。

2.1.2 今後の展開について

日本の小学校では、9月以降、遊び・食べ物・行事などのテーマについてグループで調

べ学習を行い、カンボジアと日本の比較を行う予定である。日本の児童の学習成果として、インターネットや本からの情報に加え、日本人教員の撮影したビデオや滞在中に撮った写真や教員による体験、また EPS スタッフやカンボジア訪問した院生などからの話から得たカンボジアについての情報をまとめて、カンボジアを紹介するガイドブックを作成する予定である。

2.2 カンボジアにおける国際教育プログラム

2.2.1 概要

2011年3月にカンボジアを訪問し、大学やNGO等各種団体を調査し、カンボジアを訪問する教育プログラムの準備を進めてきた。

現在カンボジアでは2500団体を超えるNGOが活動しており、カンボジアを訪問地にしたスタディツアーも多数行われている。しかしその多くが観光やNGO見学・訪問のみで終わっており、現地の人々との関わりが十分とは言えない。そのため、今回の教育プログラムでは、次の3点を留意した。

- ① カンボジアを訪問するだけでなく、事前事後活動にも重点を置く。
カンボジア訪問前に、カンボジアの社会・歴史、途上国に関する学習を行った。
- ② カンボジアの大学生と交流したり、協働する活動を取り入れる。
パニャサストラ大学の学生には事前学習の段階からFacebookやSkypeを使って事前交流に参加してもらい、カンボジア現地では大学生間で交流を行ったり、カンボジアの地域に貢献する社会貢献アクティビティと一緒に取り組んだ。
- ③ 現地のニーズに合わせた社会貢献活動を行う。
EPSに地域のニーズ調査をしてもらい、農村部に位置する小学校の看板作成を社会貢献アクティビティとして取り入れた。この社会貢献アクティビティでカンボジアと日本の大学生と一緒に協力して取り組んだ。

2.2.2 学習目標

このスタディツアーを通して参加した学生に身に付けてほしい力として、2007年度より関西大学が掲げている長期ビジョン、「考動力」を学習目標の軸とした。「考動力」とは、多様な情報の中から総合的に物事を考え、判断し、それに基づいて、新しいことに挑戦する意欲を持って、実際に行動できる力を指している。「考動力」を教育プログラムに当てはめると具体目標は次のようになる。

- 考える力の向上
 - カンボジア人との交流を通じて、地球的課題(global issue)について考える。
 - 異質なモノ・人と触れる機会を通して、新しい知識を創造する。
 - NGO等で活動する人をロールモデルとし、自分の将来について考える。
- 行動する力の向上
 - 自分に出来ることを考え、実際に行動する力や問題解決力をつける。
 - 社会貢献活動に参加することで、自己効力感や達成感を高める。
 - 現地の人のニーズを満たす行動がとれる。

2.2.3 事前学習

時間割の関係で事前学習は2グループに分けて行った。事前学習のスケジュールと内容を下記に示す。

日付	内容
2011年5月中旬～	参加学生の募集 7名の参加が決定
2011年7月6日	事前学習1回目(グループ1) - オリエンテーション - パニャサストラ大学生に向けて英語による自己紹介ビデオ作成
2011年7月13日	事前学習2回目(グループ1) - カンボジア基礎情報 - 安全・危機管理 - スタディツアーの目標設定
2011年7月16日	事前学習1回目(グループ2) - オリエンテーション - パニャサストラ大学生向けに英語による自己紹介ビデオ作成
2011年7月18日	パニャサストラ大学との Skype 交流1回目 自己紹介、文化紹介、交流についての打ち合わせ
2011年7月20日	事前学習3回目(グループ1) - 日本紹介準備 - スタディツアー最終確認
2011年7月23日	事前学習2回目(グループ2) - カンボジア基礎情報 - 安全・危機管理 - スタディツアーの目標設定 パニャサストラ大学との Skype 交流2回目 Skypeはネットワーク不備のため接続が出来なかった
2011年7月30日	事前学習3回目(グループ3)、 - 日本紹介準備 - スタディツアー最終確認 パニャサストラ大学との Skype 交流3回目 - 自己紹介、文化紹介、交流についての打ち合わせ

事前学習の内容は、以下の4点である。

1)カンボジアの基礎情報

2)危機管理、安全管理

途上国内で注意すべき行動、食べ物や衛生面での自己管理、予防接種について。

3)日本紹介活動の準備

現地の人やパニャサストラ大学の大学生に対して発表する内容を決め、プレゼンテーションの準備を行った。日本紹介は訪問先である日本語教室や、交流相手パニャサストラ大学生に向けて行った。こちらで用意した事前学習の時間だけでは、不十分なため、参加者同士で適宜、打ち合わせの機会を持ち、準備を進めるように促した。

4)パニャサストラ大学の大学生との交流(Facebook、 Skype)

Facebook 上にコミュニティを作成し、両国の学生が自由に交流できる場を設け、交流の促進を図った。また、Skype でカンボジアと日本を繋ぎ、学生同士が顔を見ながらリアルタイムで交流をするための機会も設けた。

参加学生が事前学習に参加し、カンボジアを訪問する心構えをしっかりと持てるようにした。また、ビデオ会議で事前に相手の顔と名前を確認し facebook にコミュニティを作り、自由に交流する場とした。参加学生の ICT スキルが十分でないことと、facebook を利用したことがなかったため、最初は書き込みが少なかったが、楽しい雰囲気を作り、書き込みを促すことによって次第に facebook への書き込みは増えてきた。一方、パニャサストラ大学の学生は facebook をよく利用していたため、最初から頻繁に書き込みがあり、積極的にコミュニケーションをとりたいという態度が伺えた。

また、日本人学生は Facebook 上に事前学習の振り返りを毎回終了後に書き込み、学びを深めるとともに、参加学生同士の相互理解を深めた。

2.2.4 滞在

カンボジア滞在中の概要を下記に示す。

月	日	曜日	活動	参加者
8	5	金	カンボジア到着 ・EPS スタッフと夕食会	関西大学学生
	6	土	・スタディツアーのオリエンテーション(平川) ・ローカルマーケット (Phsar Leur) 見学 ・EPS についてオリエンテーション ・パニャサストラ大学にて学生交流夕食会	関西大学学生 パニャサストラ大 学学生
	7	日	・EPS 活動サイト訪問(小学校、農村) ・国立博物館見学	関西大学学生
	8	月	・アキラ地雷博物館見学 ・一二三日本語教室訪問 ・プラムマロス寺院の英語教室訪問 ・ワットスバイ小学校の英語教室訪問	関西大学学生
	9	火	・パニャサストラ大学にて両学生によるカンボジア/ 日本についてプレゼンテーション ・社会貢献アクティビティ (トロップpensバイ小学校にて看板作成)	関西大学学生 パニャサストラ大 学学生
	10	水	・社会貢献アクティビティ (トロップpensバイ小学校にて看板作成、植林)	関西大学学生 パニャサストラ大 学学生
	11	木	・社会貢献アクティビティ (トロップpensバイ小学校にて看板作成) ・パニャサストラ大学学生と学生交流夕食会	関西大学学生 パニャサストラ大 学学生
	12	金	・ローカル NGO、ACODO 訪問 ACODO: シェムリアップで孤児院を運営している ・世界遺産アンコールワット見学 ・ACODO の子どもによるダンス見学と日本人ボラン ティアとの夕食会	関西大学学生

13	土	・クメール伝統織物研究所 (IKTT) 訪問 ・トンレサップ湖見学	関西大学学生
		・サイクリング(市内⇄郊外) ・学生同士の夕食会	関西大学学生 パニャサストラ大 学学生
14	日	・人口湖バライでピクニック、水泳 カンボジア出国	関西大学学生
15	月	帰国	関西大学学生

スタディツアーの様子		
		
カンボジアと日本の大学生の初対面時のオリエンテーション	市場でフルーツを食べる日本人大学生	パニャサストラ大学でカンボジア紹介をするカンボジアの大学生
		
パニャサストラ大学で日本の歌を歌う日本の大学生	小学校で尺八を披露する日本の大学生	看板作成をする小学校
		
看板作成のために活動する両国の大学生	看板の柱をセメントで作っているカンボジアの大学生	小学生と踊ったり歌ったりしている両国の大学生

2.2.5 振り返り

教育プログラムは予定の内容を実施し、無事に終了した。活動を振り返り、課題について考察する。

(1) 運営方法について

プログラム2日目には、日本人学生とカンボジア人学生が対面し、オリエンテーションを開いた。最初に、日本人学生とカンボジア学生の交流機会を設けたことで、協働して活動に取り組む一体感を生み、その後の活動がスムーズに運んだ。オリエンテーションではアイスブレイキング、スケジュールの共有、学習目標の確認、自己紹介を行った。

プログラムを柔軟な対応で調整したことで、学生の参加意識を高めることができた。たとえば、EPSによる活動紹介を時間の都合で、当初想定していた時間と場所を変え、パニャストラ大学の教室で行った。電気の使える教室を利用することで、パソコンとプロジェクターをつなげ、プレゼンテーションができた。急遽パニャストラ大学からの申し出があり、教室を借りることができ、参加者がプレゼンテーションに集中できる環境を整えることができた。また、8月13日と14日の2日間は、雨季のため想定外の豪雨に備え活動予備日としたが、プログラムは予定通り進行することができた。そのため、予備日を学生が自主的に企画した活動に充てることができた。

全体的に問題なくこなすことができた教育プログラムではあるが、課題として次の3点を上げることができる。第一は、コーディネータの運営力が不十分であった点である。日本人2名、カンボジア人3名(EPS)がプログラムに関わり、調整を行ったが、初めてということもあり、コーディネータ間での情報共有ができなかったり、意思決定がスムーズにいかなかったりした。本プログラムを実施するために、4月から7月にかけて電子メールでやり取りをしたり、ビデオ会議で情報共有をしたりしてきたが、十分とはいえなかった。例えば、EPS側は、代表が週末しか参加することができなかったため、現地で学生に付き添ってくれたコーディネータが十分に活動内容を把握していなかったことがあげられる。EPSから2名が同行してくれたが、全体スケジュールや内容に関して把握しているものの、次の日や数日後のために今何をしなくてはいけないのかということを理解して自主的に動いてくれることはほとんどなかったため、同じことを何度も確認する、逐一指示を出す必要があった。また、カンボジア・コーディネータの不十分な語学も問題であった。日本人コーディネータはクメール語を理解できい。カンボジア人コーディネータの一人は英語ができず、初級の日本語を話すことができる。もう一人は、簡単な英語でしかやり取りができない。コーディネータ同士のやり取りは、日本語と英語で2回行わねばならず、意思疎通に問題を残した。

第二に、社会貢献活動として看板作りを行ったが、その調整が十分ではなかった点が上げられる。小学校から、学校の看板を建てて欲しいという要望があがった。看板を作る手順や学生の参加の仕方など、具体的な活動を明確に把握することなしに、作業を始めてしまった。職人1名がきて作業が始まったが、学生がどのように手伝うか共通理解がないまま進めたため、効率的な作業が行えなかった。職人はクメール語しかはなせず、カンボジア人コーディネータが通訳をしたが、意思疎通が十分にできなかった。また、看板印刷会社の不手際で活動中に看板の印刷が終わらなかったため、看板用の柱を建てるだけで予定の日程が終了してしまった。途上国では、物事が予定通りには進まないのは当然であるので、こういう点を考慮した運営が必要になる。

第三に、カンボジア側の組織間の連携が不十分であった点である。EPSとパニャストラ大学が、本プログラムでの連携相手として位置づけられていた。日本人コーディネータは、EPSとパニャストラ大学とそれぞれ事前の調整をはかっていたが、両者間でのコミュニケーションが十分にとられていなかった。そのため、EPSとパニャストラ大学との関係がギクシャクとしたものになり、協調関係を築けずに、亀裂を生む結果となってしまった。考えられる原因としては、関西大学がカンボジアの両団体と調整を行っていたため、カンボジアの両団体がコミュニケーションを図る機会がなく、スタディツアーを実施

したことが考えられる。

(2) プログラム参加学生について

本プログラムでは、関西大学内で公募を行い、参加希望者を募った。参加した学生は、カンボジアに興味を示し、積極的にカンボジアの人々に関わろうという意欲を見せていた。英語力のない日本人学生は訪問先での英語の解説を必死に理解しようとする態度を見せ、英語力のある学生は積極的に質問を投げかけていた。英語力のない学生は、英語での解説を十分に理解できない自分自身に対して「今ほど英語が出来なくて悔しいと思ったことはない。もっと英語が出来ればもっと EPS の代表が伝えたいことが理解できるのに。」という感想を述べていた。

EPS の活動サイトを訪問し、学生は初めて農村部の生活を目にし、その貧しさに驚いていた。また、自分たちが住んでいる環境との違いと比較しながら豊かさや貧しさとは何かを考えるきっかけとなった。さらにカンボジアの大学生との交流機会を多く持ったことで、同年代の学生はどういう生活や考え方をしているのか、直接話しをする事ができ、相互理解を深めた。帰国後は Facebook や Skype を通じて連絡し合うなど、今後の交流につながった。また、大学生だけでなく小学生と交流する機会もあり、最初は言葉が通じないためどのようにコミュニケーションをとったらよいか分からなかったが、次第に交流を始めるようになり、最後の方は追いかけてこをしたり、簡単なゲームをしたりして走り回って遊んでいた。貧しい環境におかれているにもかかわらず、笑顔を見せる子どもたちに感動し、自分たちはカンボジアの子どもたちに何が出来るのだろうかと自問自答していた。

このように本プログラムに参加した学生は、大きく成長できたといえるが、個々の学生に目を向けると改善すべきいくつかの課題が浮き彫りになる。まず、英語力のない学生やコミュニケーション力が低い学生を支援する必要があることである。本プログラムは全学部対象に参加者を募集したが、外国語学部の学生とそれ以外の学部の学生では語学力に大きな差があった。カンボジアの学生も英語ができる日本人学生とコミュニケーションとりがちであったため、英語力のない学生は取り残されがちであった。活動中グルーピングに配慮したりして、積極性を促すような工夫が求められた。何気ない会話を通して、積極的にコミュニケーションをとるように促したり、英語の表現を教えたりする支援も求められる。

3.今後の活動

カンボジアの取り組みは、現在も活動の途中であり、2011 年度の活動として今後も継続して行っていく予定である。初等部の交流学习は、来年度も継続予定であり、カンボジアを通して異文化を理解していく総合学習として位置づけていく。また、本学学生が参加した交流プログラムは、2012 年 3 月にも予定しており、継続していくことで、カンボジアの NGO や大学との連携を深め、調整がスムーズにできるように運営を改善していく。本教育プログラムは、全学共通のサービス・ラーニング科目として単位化することを視野に入れ、カリキュラムのなかの位置づけを検討していく。

4.参考資料（訪問先概要）

4.1 EPS (Education for Population Support Foundation)

<http://epscambodia.org/>



EPS は農村部における教育開発を目指したローカル NGO である。2008 年から活動を開始し、カンボジア内務省から認可され活動を行っている。EPS は現在 2 つのプログラムを実施している。

(1) 奨学プログラム（学校用品の給付による教育支援）

この活動は、シェムリアップの農村部に位置するトロッペン・スパイ小学校に通う小学生 4～6 年生を対象に行っている。家が貧しく、学校に行くことが出来ない子どもたちに、学校用品（制服、文房具など）を提供し、学校に行くことが出来るように支援している。子ども 1 人につき、年間 50 ドルの支援を寄付によってまかなっている。また、子どもが途中で学校に行くのをやめてしまう状況を防ぐために、子どもの家庭に農業プログラムを同時に行っている。

(2) 農業プログラム(農業による収入向上による貧困家庭および教育支援)

野菜栽培、養殖、養鶏、家畜、肥料作りなど貧困家族が自立した生活を送れるように支援を行う。畑作りの支援から始まり、稚魚を養殖するための池作りや稚魚の提供、養鶏、家畜のための豚や鶏などの提供と研修を行っている。

EPS はプノンペンとシェムリアップに事務所を持っており、活動はシェムリアップ事務所で行われている。代表は首都プノンペンに滞在し、別の NGO の専従として勤務している。毎週末にシェムリアップに来て、フィールドサイトで活動の進捗状況をモニタリングしている。シェムリアップ事務所では現在、有給(フルタイム)スタッフ 2 人、ボランティア 1 名がおり、プノンペン事務所ではボランティアスタッフ 5 人、有給(パートタイム)スタッフ 1 名がいる。

本教育プログラムでは、EPS から代表(英語)、シェムリアップのスタッフ 1 名(日本語)、ボランティアスタッフ 1 名(英語、日本語は初級)の 3 名が中心となり関わって運営された。

4.2 PEPY

2005 年から活動を開始している。アメリカを本拠とする国際 NGO(<http://pepyride.org/>)で、カンボジアで活動している。当初はシェムリアップで、サイクリング事業でファンドレイジングを行い他 NGO の支援を行っていた。現在は、「質の高い教育へのアクセスを通

じたシェムリアップ地域の農村部の自立と住民の生活向上」をミッションに活動を行っている。農村部における学校建設(小学校、中学校)を行うと同時に、カンボジア教育省や他 NGO 団体と協力しながら環境教育、保健教育、クメール語教育、図書館教育などに力を入れ、授業実施と教員に対しての研修を行っている。教育の質を高めるために、\$100 ノートパソコン(<http://laptop.org/en/index.shtml>)を導入し、可能性を探るなど、学校を中心に様々な活動を行っている。

4.3 クメール伝統織物研究所(IKTT)



日本で友禅職人であった森本喜久男さんが 1996 年に設立し、カンボジアで伝統織物の復興と活性化に取り組んでいる NGO である (<http://iktt.esprit-libre.org/>)。クメール王朝から続くカンボジアの織物技術は、内戦やポルポト政権下での文化破壊により衰退してしまっていたが、それを再生させるための活動を献身的におこなってきた。現在、シェムリアップの都心部にある工房にて織物技術研修を貧困女性の自立支援も兼ねて、質の高い織物の生産を行っている。また、2003 年より、シェムリアップ郊外にて「伝統の森」という名のプロジェクトを立ち上げ、織物生産に欠かせない蚕や染料などを自然の循環システムを活用しながら再生する農村開発事業を行っている。

4.4 ACODO (Assisting Cambodia Orphans and the Disable Organization)



約 70 名の子どもたちを受け入れているローカル NGO (<http://www.acodo.org/>) である。子どもが多いため養ってもらえない家庭の子ども、エイズ感染孤児、両親のいない子どもなどが共同生活を行っている。子どもを保護し学校に通わせ、さらに語学(日本語、英語、ドイツ語)、縫物、伝統舞踊などを子どもたちに教えている。毎晩、伝統舞踊を観光客に見てもらい、寄付金を集めている。また、国から土地を借り受け、農業事業を始め、持続可能な運営資金の確保と自給自足の生活を目指している。